

今回の豪雨の原因は「線状降水帯」。九州北部に停滞した前線の影響で、積乱雲が同じ地域で連続して発生した。昨年の西日本豪雨など、ここ数年、日本各地で大きな被害をもたらしている気象現象だ。8月28日未明から降り出した大雨は、佐賀市の24時間降水量としては観測史上最も多い390ミリとなり、同日午前5時50分には県内18市町に大雨特別警報が発表された。

大雨は有明海の満潮と重なり、佐賀平野の多くの地域が冠水した。小城市を流れる牛津川周辺では最大深さ約3メートル、南北約10キロの範囲が浸水した。武雄市の六角川の周辺では東西約14キロにわたって浸水が発生し、市内の北方町志久では深さが約2.7メートルに達した。道路が冠水して車が流され2人が死亡、また水路に沈んだ車から1人が救助されたが意識不明の重体となっている。佐賀市内でも各所で道路が冠水。市街地一帯は水に沈んだ。床上浸水が26棟、床下浸水は909棟にのぼった。県内各地では車両の水没も相次

■佐賀平野の「宿命」

43万人に避難指示

家庭でもできる浸水防止対策（簡易水防工法）

ここで紹介している水防工法は、水深の低い小規模な浸水や、浸水の初期段階で行うものであり、雨量や浸水の状況を見極め、浸水被害が大きくなるような場合は、早めの避難を心がけてください。

●ポリタンクとビニールシートによる工法

灯油用のポリタンクなどに水を入れ、ブルーシートやレジャーシートなどの上に並べて置き、シートを巻き込んで使用します。

●プランターとビニールシートによる工法

ポリタンクの代わりに土の入ったプランター（植木鉢）を使用します。

●止水板による工法

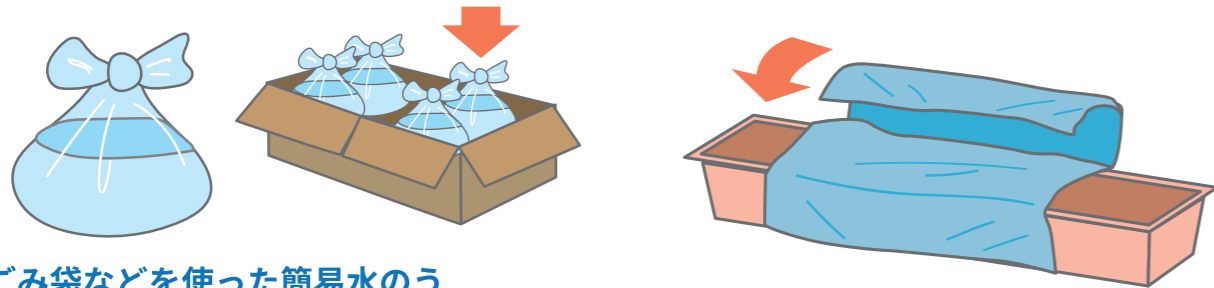
出入り口などに長めの板などを立てかけて固定し、浸水を防ぎます。板がない場合は、テーブル、タンス、畳などで塞ぎ、水の流入を防ぎます。

●ごみ袋などを使った簡易水のう

家庭用のごみ袋を2〜3枚重ねて水をごみ袋の半分程度まで入れ、きつく縛って簡易水のうを作ります。それを出入り口などに隙間なく並べて水のうの代わりに使用します。ごみ袋がすぐ敗れるときは、重ねる枚数を増やしてください。

●簡易水のうとダンボール箱の併用

簡易水のうをダンボール箱に敷き詰めて使用します。水のうだけの場合と比べて強度が増し安定するため、水のうを高く積み重ねることができます。



■徹夜工事で配水再開

28日以前から雨が続いたこともあり各地で土砂崩れも発生した。佐賀市金立町大門地区では金刀比羅神社に続く道などが崩壊。同町では金立高所配水池近くの鉄製送水・配水管が濁流で道路ごと流された。金立町や久保泉町、大和町の約750戸が断水となり、5カ所で応急給水を実施した。夜を徹した応急処理により、翌日には送水管の配管が完了し配水を再開した。

道路のり面の崩壊による土砂流入や冠水などのため、県内では国道385号の坂本峠入口など、国道1カ所、県道6カ所が一時全面通行止めになった。長崎道の武雄ジャンクション付近では大規模な地滑りの影響で路面が隆起。長崎方面への下り線が通行止めになった。9月10日に解除されたが、しばらく対面通行での走行が続く。

観光業にも大きな打撃を与えた。県の調査によると、8月28日から9

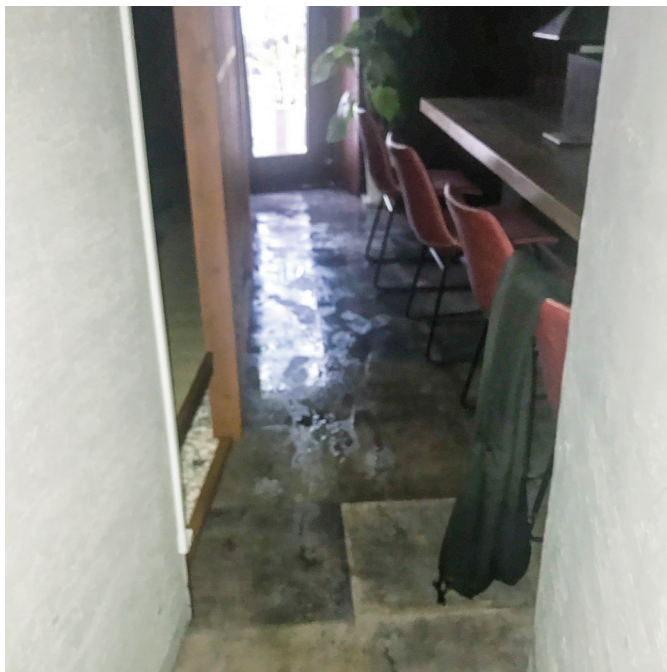
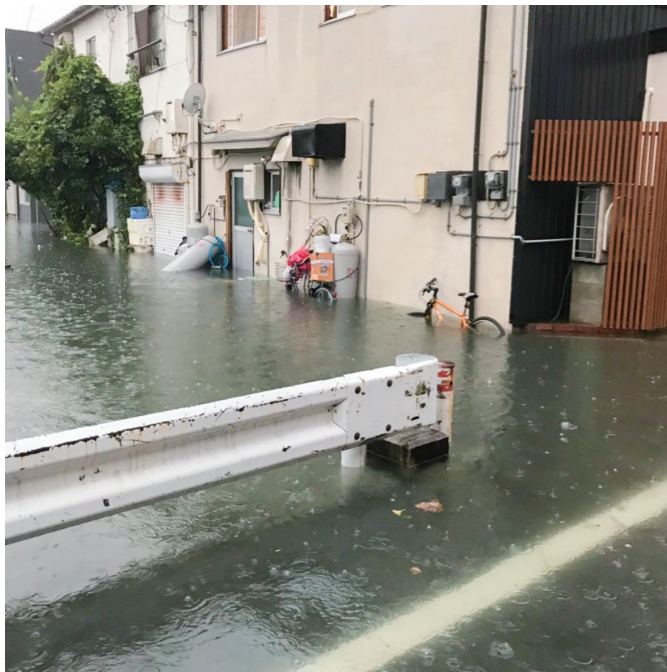


緊急特集

佐賀豪雨

ドキュメント

佐賀県内に大きな被害をもたらした佐賀豪雨。8月28日未明から朝にかけて局地的に猛烈な雨が降り、佐賀市など県南部では明け方に1時間に約110ミリから120ミリ以上の雨量を記録した。この豪雨により死者3人、意識不明1人、全壊家5棟、半壊・一部損壊5棟、床上・床下浸水約4千棟の被害が出た。また一時、43万人に避難指示が出たほか、冠水した店舗の休業、交通機関の運休、一部道路の通行止め、大量の宿泊キャンセルなど、佐賀に大きな爪痕を残した。緊急特集として佐賀豪雨被害の実態と、復旧へ向けて大きな支えになる「損害保険」についてレポートする。



焼味処 **輪久**

住所／佐賀県佐賀市大財1丁目4-11

営業時間／18:00～翌3:00まで

入店可 (L.O2:30)

定休日／木曜日

席数／24席

予約・お問い合わせ／050-5597-8243



「普段は午前3時までお店を開けているんですが、豪雨の前日は雨が強くなったのでお客さんも来ないだろうなと思い早じまいしました。店の横を流れる川の水位が上がってきていたのを覚えています。帰宅して寝ていたら午前5時ごろ携帯のアラート音で目が覚めました。自宅は1階にあるんですが、水が入ってきて畳がふわふわ状態。身動きがとれなくて、店の近くにいる知人に見に行ってもらったら、店内まで水が入っていることが分かりました。すぐに行きたかったんですが動ける状況じゃなかったですね」。大財町で焼肉ダイニングバー「輪久」を営む水田健太郎さん。同店は8月にオープンしたばかり。佐賀の有名焼肉店で約20年働いた水田さんが厳選する佐賀牛と佐賀の日本酒。ワインもソ

月9日までに県内宿泊施設であった予約キャンセルは少なくとも約1万2000人。佐賀市が最も多い4500人で武雄市は1500人。大きな被害がなかった嬉野市でも3000人、唐津市も1000人のキャンセルがあったという。

■店内まで水「うわー」

1カ月前にオープン 床上浸水

ムリエに依頼して取り揃えるなどメニューにこだわる一方、和をイメージした落ち着いた空間にはカウンターを設け、焼肉はハーフサイズでも提供。ひとりでも気兼ねなく、質の高い食事を静かに楽しめる気遣いが人気を集めていた矢先だった。午後2時、自宅から徒歩で友人のお店を見に行ったりしたので1時間くらいかかりました。愛敬地区の道路は水がまだ膝の高さまででありました。車が通ると波がこちらに押し寄せてくる。正直、命の危険を感じました」。ようやくお店に到着。入口は道路から数十センチかさ上げしているにも関わらず、店内まで水が入ってきていた。「うわー、という感じ。大家さんも「ここまで水が



焼味処 輪久
水田健太郎さん

来たのは初めて。30年前の大雨もこんなにひどくなかった」と言っていました。被害の確認と壊れてたものの整理ぐらいしかできず、その日はあきらめて、プレーカーを落として帰りました」。

■佐賀牛A5数十キロ廃棄

本格的な復旧作業は翌日から始まった。「被害が大きかったのは厨房関係。冷蔵庫2台と製氷機1台、生ビールサーバーなどがだめになりました。冷蔵庫には食材が入っていましたが、当然、全部廃棄。佐賀牛A5ランクの肉が数十キロ分あったので、それだけで数十万円の損害です。再開の見通しが立たなかったので予約してくださいとお客さまにお

断りの連絡をしました。オープン1カ月のデータを見て、メニューの整理をしようと思っていたところだったのに」。そして店内の清掃。茶室に至る路地のように店内に敷き詰められた白い玉砂利を洗うのも重労働だったという。「かなり念入りに清掃しましたが、独特のニオイがなかなかとれませんでした。結局1週間以上かかりました。消毒もしましたが不安だったので最終的には専門業者さんに頼みました」。新しい厨房機器がそろった9月10日ようやく営業再開。告知はSNSのみだったが、たくさんのお客さんが来てくれたという。「輪久という店名は当初、「りんく」と読んでもらいう予定でした。人と人をずつつなぐ、という願いが込められています。そういう店であり続けるために、これからもこの場所が続けていきたいと思っています」。

今回の豪雨の被害者の方に話を聞くと「損害保険」の話題になることが多い。飲食店の中には保険でカバーできる額を大きく上回る損害が出たため閉店を検討するところもあるという。水田さんは「設備関係は保険に入っていたので損害はカバーされました。ただ加入したつもり

だった休業補償の契約をしていませんでした。今回の被害では定休日も入れて13日間店を閉めました。設備関係の復旧がもっと遅ければ、再オープンにはさらに先になっていたでしょう。いくら急いでも自分たちではコントロールできない事態も予測されます。その間のスタッフ人件費などを考えると休業補償は必要だと実感しました」と振り返る。「正直、保険については、一応入っておこう、という感じで、あまり気にもしていませんでした。こういう契約になっているのかきちんと確認すべきでした。保険だけでなく、機材は多少割高でもリース契約にするなど、いざ



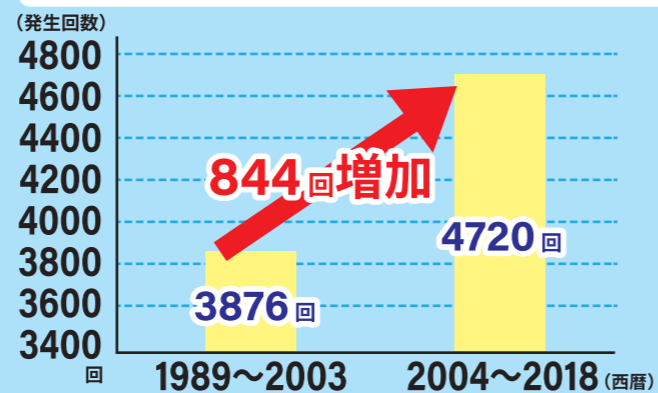
浸水1M超 全設備水没

2013年5月号特集でインタビューした相森真一さんのお店「菓子職人の小屋デタント」がある武雄市朝日町も豪雨により冠水した。28日午前4時ごろから水

武雄市朝日町

位が上がりはじめ、同店内の浸水は1メートルを超えたという。オープンや冷蔵庫、ショーケースなどの全ての設備が水没、使用できなくなった。また冷蔵庫などに保管していた商品や原料も全て廃棄。総計1.5トンにもなったという。今後は建物の補修工事や設備関係の復旧作業が続く。今年の12月中のオープンを目指している。

1時間に50mm以上の強雨発生回数



※発生回数：1989年～2003年の15年間と、2004年～2018年の15年間とで比較（気象庁ホームページより）

豪雨による洪水被害や台風による風災被害は年々増加している。1989年からの15年間に発生した「1時間に50ミリ以上の強雨」の件数は3876回だったが、2004年からの15年間では4720回と大幅に増加している（気象庁ホームページより）。



損害保険ジャパン日本興亜株式会社佐賀支店
片田真理支店長

というときのリスクマネージメントが重要だと思っています。

相互扶助へ保険「進化」

復旧を支える「損害保険」。今回の豪雨被害を受けて注意すべき点は何か？ 損害保険ジャパン日本興亜株式会社佐賀支店の片田真理支店長に話を聞いた。「豪雨当日は支店の前の道路も冠水していてトラックが立ち往生していました。このビルは防潮シートなどで対策されていたので被害はありませんでした。社員はTシャツ短パン姿で出社して業務にあたっていました。翌日には災害対策本部を立ち上げ、被害状況の確認と保険金支払の手続きを進めています。損害保険に関する注意点として、火災保険に「水災」が補償される契約になっているか、そして『新価実損払方式』になっているかを確認していただきたいと思っています」。

2016年度、同社の保険金支払事故種別件数は「水災・風災・雪災」による事故件数が、「火災」の20倍以上になっている。しかし、内閣府によると、持家世帯の水災を補償する火災保険や共済に加入している割合は「66%」に留まるなど、まだまだ「水災」に備える意識は低い。また火災保険に入れば「水災」もカバーされる、というのは単なる思い込み。きちんと保険証券を読んで確認しよう。

を引いた額」だったが、これだと被害復旧のためには一部費用を負担しなくてはならない。「新価」であれば、そういう心配がない。また「実損払」とは文字通り実際の損害額が支払われること。従来の「店舗総合保険」では浸水の程度や損害額に応じて損害保険金の算出方法が変わるため、建物や設備・什器の復旧費用や商品の再仕入費用としては不十分な場合があった。「新価実損払方式」であれば、被害の程度に関わらず、水災による被害を「新価」で算出、保険金額（保険の対象に対して設定する契約金額）を限度に、損害額全額を支払う。また車両保険にも「新価特約」をつけることが可能。同社なら最長6年間加入することができるので、車が水没することがあつて

損害保険は「新価実損払方式」に

も、安心して新車に買い替えることができる。つまり「新価実損払方式」とは被保険者にとってより安心な保険内容といえる。「損害保険の考え方の基本は『相互扶助』。たくさんの方が支えてくださっているからこそ、困っている人を手助けすることできます。当社は、お客様に安心・安全な保険をご案内することによって、裾野を広げていきたいと思っています」。災害に遭わなければ損害保険は掛け損、という会話を耳にすることもあるが、自分たちの入った保険が、どこかの被災者を手助けしているのならそれは決して「損」ではない。社会のためにしっかりと役に立っている。

佐賀「見直し」少ない

損害保険は社会のニーズに合わせて「進化」している。しかし、佐賀ではまだまだ従来方式の損害保険を見直さないケースが多いという。「以前の赴任地である南九州と比べて、佐賀は災害が少ないからか、それに備えるという意識が薄い印象があります。今回の豪雨でも分かるように、どこの地域でも水害が起きる可能性はあります。保険内容の定期的な見直しを強くおすすめします」。今回の取材で改めて思ったのは同じ「飲

食店」でもその被害の状況はさまざまであるということ。例えば洋菓子店では小規模の店舗でも機材設備の復旧には数千万円かかるケースもあるという。「損害保険は、それぞれのケースに合わせてどういうリスクが想定されるかを考えて加入する必要がある。個人でも企業でも、どういう心配を持っているらっしゃるか、正確にお聞きすることが一番大切だと考えています。代理店のみなさんにざっくばらんにご相談ください」。